
改訂版・コスナーさんの思い出・2

高田龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

改訂版・コスナーさんの思い出・2

【Nコード】

N2851E

【作者名】

高田龍

【あらすじ】

故郷を後にコスナーさん達は嵐の海へ貨物船の船底に隠れて船出します。目指すは自由の国。想像を超える波と風が彼等を苦しめます。そして、遂に死者を出してしまうのです。やがて彼等は新天地に到着します。

第二章 新天地へ

何日も雨は降り続けその雨は時折、霽ハレに変わりました、昼なのか、夜なのか、何処までが空で、何処からが海なのかも判らない世界です。

雲は低く垂れ込め、その中を閃光が走り、雷鳴とどろが轟とどろいています。それをかき消してしまう波と風の音。

貨物船はまるで、木の葉のようでした。

外洋に出た後の波の高さは桁外れで、ビルのようなというより、それはもう山そのものです。

その山の斜面を、コスナーさん達密航者を乗せた貨物船は、頂きに駆け上がったかと思うと、一気に谷底へ転ふなぞこげ落ちます。

その繰り返しがいっ終るともなく続き、船底に隠れるように身を潜めているコスナーさん一家を始め、四〇人程の密航者達は、嘔吐を繰り返し、疲労し衰弱し、一人また一人と倒れていきました。

命懸けの船旅が、七日目を迎えた時、とうとう悲しい出来事が起きてしまいました。

一緒に船に乗り込んだ人達は、年齢も職業も社会での立場も様々でした。

母親に背負われた赤ん坊から、二十代の青年や、四十歳台の銀行員も、退職した教師も居ます。

その中にお年寄りの夫婦が居ました、時計職人の夫と二人ですと慎重つつししく暮してきた奥さんは病気がちで、二人には子供が無かったのですが、近所でも評判の仲の好い夫婦でした。

その七十歳を迎えたばかりの奥さんが、この嵐の海を越えて来た為に、体調を崩してしまい、三日目には起きられなくなり、五日目には意識がなくなってしまいます。

ご主人の懸命な看病も、必死の祈りも報われる事はなく、七日目の

朝が来た時、暗く寒い船底の隅で息を引き取ったのです。

痩せ細った奥さんの亡骸を抱きかかえたご主人の肩が小刻みに震えています、二人は小さな丸窓から洩れてくる青白い光に包まれ、ぼんやり浮かびあがたその姿は、まるで悲しみに溢れた絵画のように見えました。

この二人には、始めから無理な旅だったのかも知れません。

厚く、低く垂れ込めた鉛色の雲の間から、幾筋もの陽光が差し、その光の帯が荒れる海を静まらせてくれたように波も穏やかに為った朝、皆で老婆の骸を海に葬ったのです。

コスナーさんはこの時まだ六歳です、知らない老婆が死んだ事よりも、久しぶりに海の空気を胸いっぱい吸い込む事が出来て、とても嬉しく、知らないお婆さんの死には正直、悲しみの感情はありませんでした。

それよりも、久しぶりにデッキから見上げる空や、果てしなく広がる海の景色に心が躍り、地の底のような船底には二度と戻りたくありませんでした。

幼い彼の願いは一日も早く土の上や、石畳や、舗装道路や、なんでも好いから、固い揺れない地面に立つ事、そして、その固い揺れない地面を思い切り走り回る事だったのです。

そのコスナーさんの願いを叶える為には、真つ暗な船底での生活をもう少し我慢するしかないのです。

ともかく、この永遠に続くかと思われた恐ろしい船の旅も終わりが近づこうとしていました。

貨物船の船長から一日に一時間だけデッキに上がっても好いと許可が下りたのは、お婆さんを葬ってから五日が過ぎた朝方のことでした。

『…終わる、やっと終わる』

父親のウィリアムが、貨物船の横腹で弾けている白い波を見下ろしながら、誰に言うともなく呟きました。　コスナーさん達を乗せた

貨物船は、やっと危険な海域を越えたのです。

『いよいよ着くのね』母親のシャーロットがウィリアムの背中に尋ねます。

その言葉が風に流されて、デッキのあちこちにいた密航者達の耳に届くと、俯いたままの人達は顔を上げ、お互いの顔を見ました。どの顔も、絶望と死への恐怖、飢えと疲労で頬は瘦けて青白く、眼は落ち窪み瞳に力はなく、まるで死人のようです。

その彼等の瞳が闇の中から希望の灯火を見つけた瞬間でした。やっと目指す自由の国に辿り着くのだ、そう思うと、彼等の氷のようにな固まってしまった心も少しずつ溶けて来るのでした。

自然に身体が動きだして思い思いの歌を口ずさみ、思い思いのリズムで、手を繋ぎ、肩を組み、足を踏みならしながら、全身で歓びを表現しています。

彼等は勝ったのです。彼等は、ついに地獄の航海から生還したのです。

やがて、デッキには彼等の大きな輪が出来て、皆お互いの健闘を讃えあい、生きて新天地に到着出来る幸運を、時の過ぎるのも忘れて、歓び合うのでした。

まだ小さかったコスナーさんも、大人たちの輪の中に三歳年上の姉のキャロンと一緒に加わり、見よう見まねに踊っています。

この先、彼等を待ち受ける新天地がどのような運命を彼等に与えるのかは誰にも解りません、きっと過酷な運命が待って居る筈です。でも、彼等はあの凍てついた北の国から、荒れ狂う大海原を餓えと寒さと死の恐怖を克服しながら此処までたどり着いたのです。

それを思えば、たとえどのような厳しい現実が待っていたとしても、

彼等はきつと、乗り越えて行くことでしょう。

もうすぐ、遙か前方に朝靄^{あさもや}

に隠れて、横たわる新天地が姿を見せるでしょう。

艦橋の船長から声が掛かりました。

『みんなーッ自由の女神様のお出迎えだぞーッ』

全員の視線が、船首の先の靄^{かす}に霞んでいる辺りに注がれます。

やがてゆつくりと白く霞む中から、巨大な人影が姿を現し、密航者達の間から一際高く歓声^{ひときわ}が上がります。

その巨大な人影が、あの高く松明^{たいまつ}を掲げた自由の女神像だという事に彼等が気が付くまで、それほど時間は要りませんでした。

さあ、コスナーさん一家四人の新しい出発です。

その門出をそつと見下ろす自由の女神像の表情が彼等に微笑み掛けたように見えました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2851e/>

改訂版・コスナーさんの思い出・2

2010年10月20日19時29分発行